

Title	「哲学」100集記念によせて
Sub Title	Celebrating the hundredth issue of "Philosophy"
Author	石黒, ひで(Ishiguro, Hide)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1996
Jtitle	哲學 No.100 (1996. 3) ,p.1- 3
Abstract	
Notes	100集記念号
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0001

「哲学」100集記念によせて

三田哲学会会長 石 黒 ひ で

大正15年に三田哲学会が「哲学」を創刊してから70年経ち、第100号の刊行を迎えます。本誌を支えて来られた各地の三田哲学会会員の皆様も各自各様に「哲学」の過去を振り返り、現状と未来についてお考えでしょう。

「哲学」は同名の他の刊行物と異り、哲学に携わる者が仲間の為に書く狭い専門誌ではありませんし、大きな学部の研究の現状を示す為に、所属全学科の論文を掲載する紀要でもありません。三田哲学会の傘下には、哲学三専攻と人間関係学科四専攻がありますので本誌は哲学、論理学、倫理学、美学、美術史学、音楽史、音楽理論、心理学、認知科学、教育学、社会学、人間科学、等々の論文の発表の場となっています。いずれも、人間の在り方の理解を目指すものでありながら、各々、非常に異なる方法や問題に基づく諸分野です。

この限定された多様性が決して弱点とならぬ様に（たとえば審査のある専門誌より規準が曖昧だ、紀要ほどは広い分野の人の目につかない、等と考えて、会員が論文を出し過ぎるといような結果にならぬ様に）、そして逆に独自の強みとして利用したいものです。

「哲学」に発表される論文は、^{フィールドワーク}現地調査を重要視する分野のもの、実験が不可欠な分野のもの、歴史的資料の綿密な考察を必要とするもの、統計的計算に依存するもの、論理的推論と証明に殆ど全てを負うもの、などさまざまです。掲載された論文に、隣接する異なる分野の方々からも質問や提

案が出されるなら自分のしていることのより深い理解を得る重要な場となると思われます。又同じ問題について異なる分野の方々の紙上の対話や討論を三田哲学会内の多様性が可能にします。専門内の規準でがんじがらめになって、素人の意見を一概に軽視する専門誌では出来ぬ質問や反論の場でもあるならば、発表の場としても大変魅力的なものとなるのではないのでしょうか。専門分野間の繋がりがますます緊密となる今日、このような場の存在は大変貴重です。

6年前に三田に参った私には過去さまざまな時期に編集に携わられた方々の御苦勞や喜憂について語る資格はありません。しかし、40年前よその大学の学生として、当時三田哲学会で重要な役割を果しておられた三人の方々に接したときの体験を思い出し、「哲学」のあり方についての考えと関連づけたいと思います。

お一人は週一回三田より本郷へ出講されて中世哲学をお教え下さった松本正夫氏。中世哲学を自然神学としてでなく、厳密な存在論として説かれていた権威。もうお一人は当時、フランス実存主義と英米系の分析哲学を紹介し、それに基いて思考されていた、いわば流行の先端を歩んでおいでで、学会などでお目にかかった沢田允茂氏、そして、三人目は、ヨーロッパ留学から帰られて間もない、量子力学の哲学の新鋭。当時としては稀有な哲学科での集合論を教えられ、私も（もぐりで）三田の授業に出席させて頂いた大出晃氏。一つの大学に全く異なるアプローチを持つ哲学者がいることは当時でも無いわけではなかったのですが、その先生方が互いに自由に論議され、相手の分野に素直な興味を持たれ、気楽に詰問されるのは大変珍らしく、刺激的でした。他の大学の若い哲学教師や学生も松本宅や沢田宅に伺ったのは、両御夫妻の御仁徳と鷹揚なおもてなしの故でもありましたが何よりも、異なるアプローチの哲学者や他の分野の方々に出遭い、気楽に論議をする楽しさの為でした。

手作りの御馳走や美酒が伴わぬにしろ、「哲学」もその様な場となるこ

とが出来ればと考えます。審査のある学術雑誌よりも、私どもが書く論文にむらがあっても、それに対する次号での質問、反論、或は支持が、より面白い結果をもたらすことができるからです。

会員の皆様からの御意見、そして論文、既に当誌に記載された論文に対するコメントを期待し、今後の発展に向けて皆様のお力添えをお願いいたします。